

＝ 特 別 号 ＝
No. 277



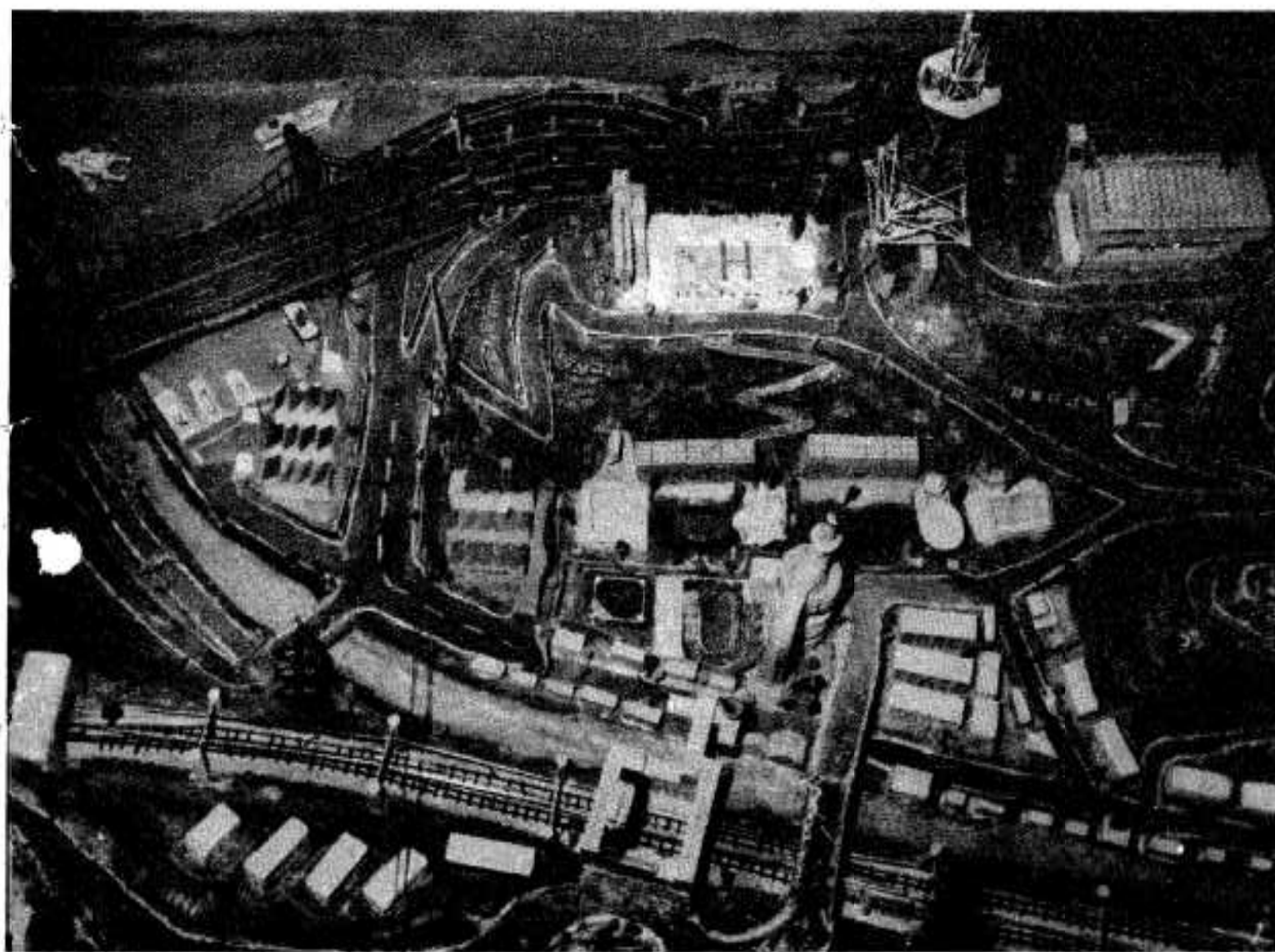
広報

あぐね

昭和45年2月25日

編集と発行 市長公室企画広報係

昭和43年8月20日 第3種郵便物認可



将来の大川地区・大川小生徒作品（パノラマ）

~~~~~ 阿久根市のビジョン…ダイジェスト版 ~~~~~

# 市民みんなで考えよう

豊かで意義あるくらしのための

＝阿久根市のビジョン＝



＝ は じ め に ＝

今日の1年は、昔の10年にもいや100年にも匹敵するといわれます。

それほど、最近のわたくしたちをとりまくすべての状況ははげしく進展し、変化しています。

この中であって、10年後、15年後のわたくしたちの郷土、わたくしたちのまちの姿を見定め、それによって計画的な市政を推進することが、いまわたくしたちに課せられた最も重要なことだと思います。

この特別号は『昭和60年のあくね』を市民の皆さん方に、よくしっていただくためにダイジェスト版にまとめたものです。

もとよりこのビジョンは完全なものではありません。市民すべての人々に、よく考え、よく検討していただきたいと思います。

そして、みなさん方の創意と努力によって、豊かで意義ある生活に向って進むための足がかりとなることを、わたくしは期待してやみません。

昭和45年2月

阿久根市長 丹 宗 忠

# 昭和60年の阿久根の姿

人口／経済／所得／  
交通／通信

## 人 口

昭和40年約36,000人の阿久根の人口は、このままの状態で推移するならば、昭和50年には約30,000人、昭和60年には約27,000人程度になるものと思われます。

また、世帯は、昭和40年の約 9,600世帯から昭和50年約 9,000 昭和60年 8,600程度となり、1世帯人員は約 3.2人程度となるでしょう。

しかし、60年代の人口、世帯とも30,000人代、9,000世帯を維持したいと思います。

| 市街地と赤瀬川の一部 | 臨本    | 折多赤瀬川の一部 | 山下  | 田代川 | 大川    | 西目    |
|------------|-------|----------|-----|-----|-------|-------|
| 15,000     | 4,800 | 1,300    | 800 | 800 | 2,800 | 1,500 |

## 第1次産業従事者は大きく減少

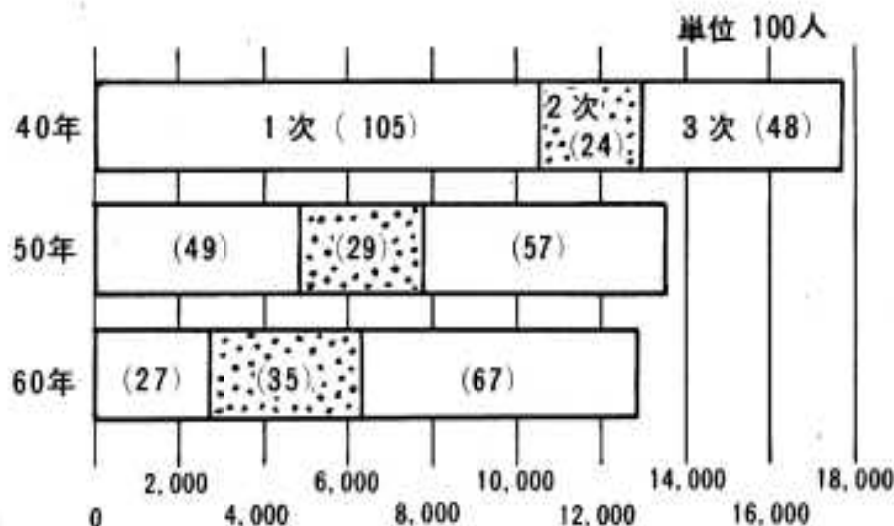
### 15,000が市街地区に

人の住む環境も大きく変わり、昭和60年には総人口の約56%の15,000人程度の人々が、市街地区およびその周辺に住むようになるでしょう。

地区別の人口はつぎの表のようになるものと思われます。

昭和40年には総従業者の60%近くを占めていた第1次産業従事者は昭和50年には約半数に、昭和60年には約4分の1の2,700人、総数の21%になるものと思われます。

その半面、第2次産業は約1.5倍で27%、第3次産業は1.4倍の52%近くになるでしょう。



## 生産所得……5倍で247億円

昭和40年約50億円であった市内生産所得は、昭和60年には、約2.3倍の115億となり昭和60年には、約5倍の247億円に達するものと思われます。

この第一の要因は、第2次産業の大巾な進出、商品の高級化とレジャー産業の進展、それに、企業的经营による農業所得などの著しい向上によるものです。

## 働く者の所得 192万円

昭和60年の就業者1人当りの所得は192万円となるでしょう。

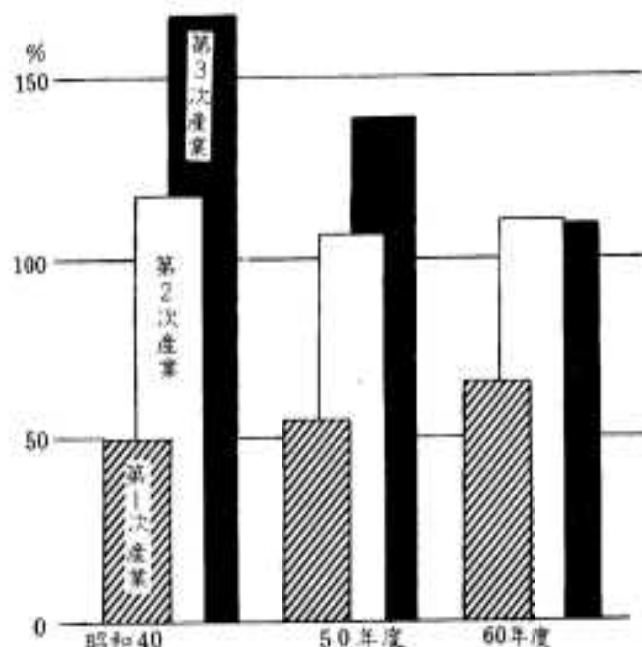
これは、昭和40年の約7倍に当たります。

各産業別にみると、つぎの表のようになり、かなり1次産業が他の産業に対して低い指数を表わしていますがこれは、昭和60年においても生産性の低い農家が相当残ることが予想されるからです。

しかし農業生産の大部分を占める、企業的な農業をとってみれば、農業と他産業の格差は少ないものと思われます。

|        | 全産業       | 第1次産業 | 第2次産業 | 第3次産業 |
|--------|-----------|-------|-------|-------|
| 1人当り所得 | 万円<br>192 | 125   | 210   | 209   |
| 倍率     | 倍<br>6.9  | 6.6   | 5.5   | 4.8   |
| 産業間格差  | %<br>100  | 65.1  | 109.4 | 108.9 |

就業者1人当り所得の産業間格差  
(全産業平均=100%)



## 市民1人当り所得90万円

昭和60年の市民1人当りの所得は90万円となるでしょう。

これは昭和40年の約6倍に当たります。

また市民の消費支出総額に占める食糧費の率(エンゲル係数)は昭和40年の約40%から27%まで低下するものと思われます。

その半面住居費や教育、娯楽や交通、通信などに費す割合が増大するでしょう。



## 市道以上は100%舗装

市を南北に貫く国道3号線を主軸に、黒之瀬戸大橋をもつ牛深へ通ずる国道、田代を経て東郷町、宮之城へ通ずる県道、尾崎を経て東郷へ通ずる県道、および大川から折口を結ぶ市道中央線、また紫尾山系の尾根をはしるスーパー林道などは、市の最も重要な幹線道路となって完全整備舗装されるでしょう。

また、その他の市内各集落を結ぶ市道も完全舗装され整備されているものと思われます。

## 自動車は1世帯1台

市内の自動車は昭和42年の4月で2,031台登録されていますが、昭和60年3.9倍の約9,000台に達するものと思われます。

これは、1世帯1台をやや上まわる数となっています。

このうちでも乗用車は75%の6,800台になると思われます。

## 東京まで7時間で

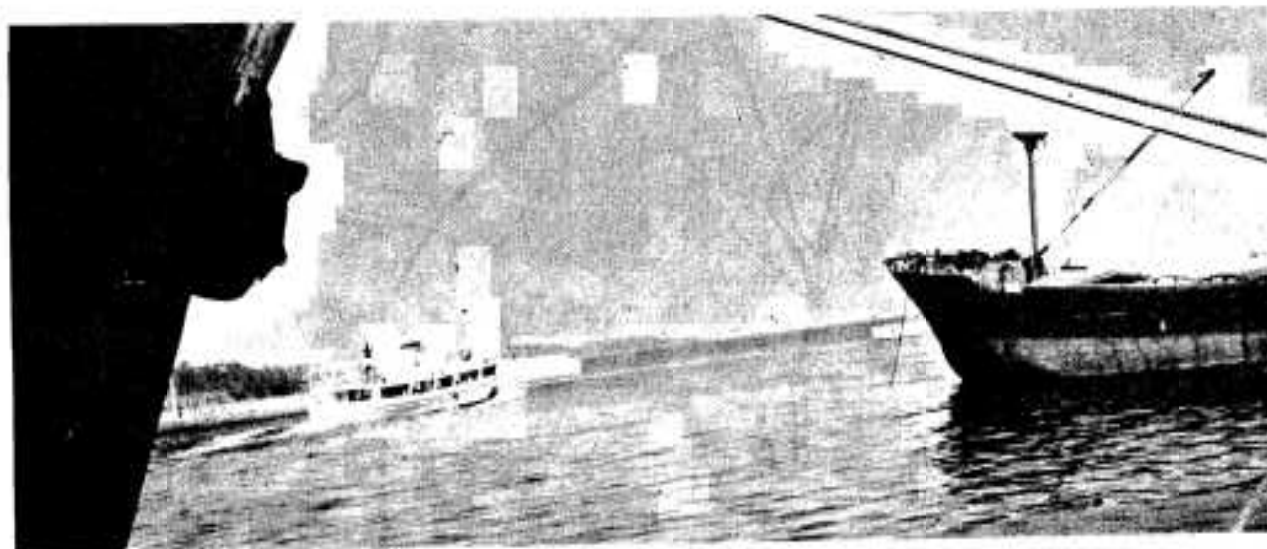
鉄道は昭和46年10月で鹿児島本線の全線電化が終り、昭和60年には複線化、および新幹線が鹿児島へ乗り入れていると思われます。

平均時速200キロで計算すれば、鹿児島ー博多1時間30分、大阪まで4時間40分、東京まで7時間10分で行けることになりましょう。

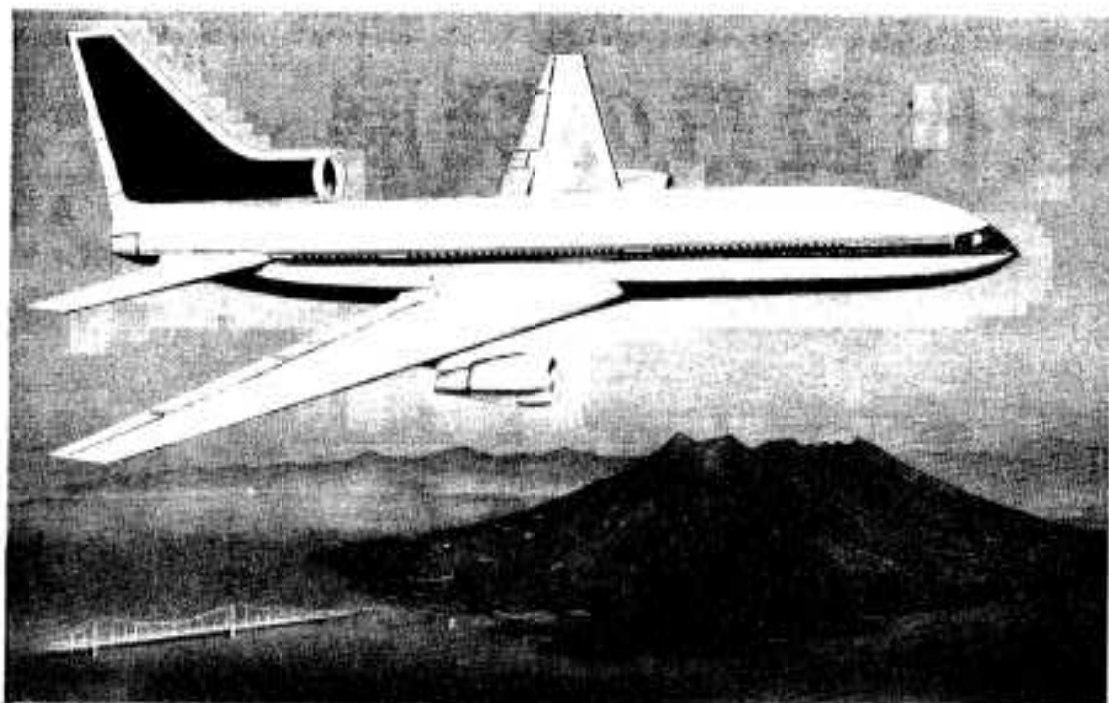
## 北薩唯一の重要港阿久根港

現在進行中の阿久根新港は近く完成して1,000tクラスの接岸ができるものとなりますが、昭和60年には少なくとも、5,000tクラスの貨客船の接岸可能な港が実現しているでしょう。

これは北薩地区における唯一の港で地域の発展に大いに役立つものと思われます。



(躍進する阿久根港)



### 活躍するヘリコプター輸送

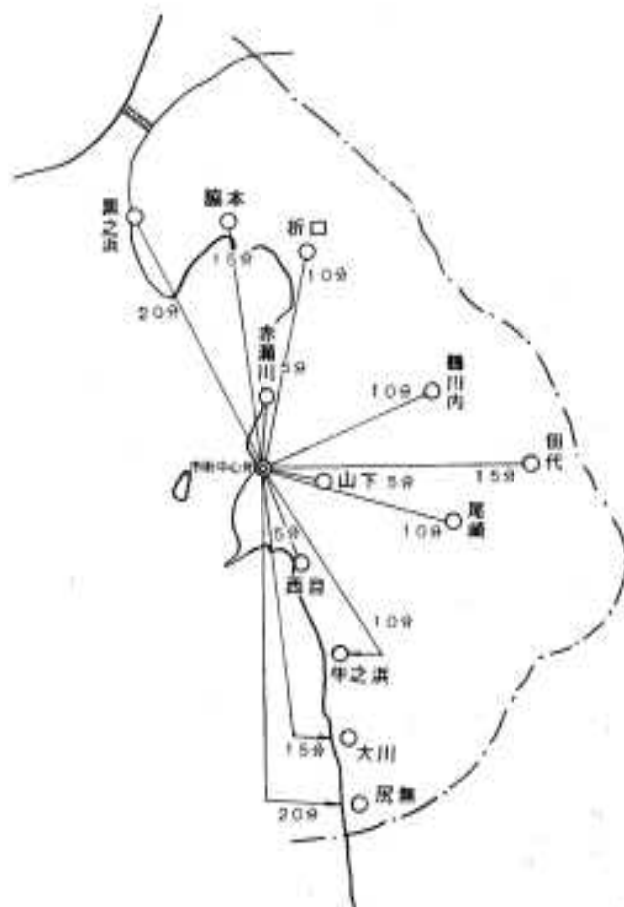
(近く就航が予想される大型機)

十三塚原の大型空港ができるとジェット機で東京まで1時間で飛べます。

この空港や、離島の天草、飯島とを結ぶものにヘリコプターが大いに活躍するでしょう。

このために、ヘリポートも整備されることになりましょう。

将来の久松新港を中心とした自動車時間帯



### 電話も1世帯1台

昭和43年の電話の普及は約6世帯に1個となっていますが、昭和60年には1世帯1台まで完全に普及するものと思われます。

当然、藤本、大川も自動化され、市内1本化されて全国自動網にくみ込まれていることになります。

テレビも、100%がカラーとなりすべてUHF（極超短波）となるでしょう。

# 近代産業の発展

農業／林業／水産業／  
工業／商業／観光

## ＝ 農 業 ＝

### 800戸の企業農家

昭和60年における、市内の農家の数、いわゆる専業の農家は800戸程度になるものと思われます。

これは企業的な農家であって〇〇農園とか〇〇農場とかいわれる農家となることでしょう。

しかし、その他に約1,300戸程度の自給菜園や全く小規模の農家も残るでしょう。

### 平均耕作面積3ヘクタール

昭和40年約0.5ヘクタールの平均耕地面積は、昭和60年には約3ヘクタールとなるでしょう。

そして農業に従事する人の数も昭和40年の約9,600人から2,400人へと約4分の1に減少するものと思われます。

### 進む機械化と、基盤整備

少ない従業者で広い農地を耕作するにはあらゆる面

で多くの機械がとり入れられることになるでしょう。

また、その機械を能率よく動かせるために、農地の基盤の整備がすみずみまで進むでしょう。

農道は勿論、水路などが整然とととのった耕地となるでしょう。

### 進む果樹、園芸、畜産

文旦や、みかん、高級野菜、それに畜産などは温暖な気候と地域の特性を生かして、名実ともに阿久根の特産となり、市内生産額の大部分を占めることになるでしょう。

しかし、作物を選ぶことは、各農家の経験と知恵と、社会の変動によって、それぞれの農家が選ぶことになるでしょう。

### 完備した新らしい流通体系

昭和60年代に生産される農産物は、円滑に合理的に出荷販売されるための新らしい流通体系が完成し機能を発揮するでしょう。



生産者



共同運果場



産地冷蔵倉庫

- コールドチェーンシステム（低温流通方式）  
新鮮な食品の流通は、どうに品質保証がたい  
せつで、生産から消費まで一貫したコールド  
チェーンシステムがその中心になります。



消費者



ショウケース



大口需要者



中央卸売市場



スーパー



冷蔵運搬船



冷蔵貨車



冷蔵トラック



消費地冷蔵倉庫

## 500万円農家の出現

企業的な農家の大部分は年に500万円以上の所得をあげる農家となるでしょう。

経営の方式としてはやはり家族中心の経営が主体であるが、法人組織の協業体も多くなり、また農業請負制度も発展することになるでしょう。

## 理想的な農協の姿

企業的な農家が生まれ、農産物の生産地化が進めば、その地域に合致した専門農協が著しく発展するものと思われます。

また広域的に統合された総合農協も充実されて、コンピューターをはじめとする機械化も進み、農業の指導センターとしての役割を果たすものと思われます。

## ＝ 林

## 業 ＝

## 人口林率は70%

昭和40年の人口林率は約49%であるが、昭和60年には72%になるものと思われます。

樹種も豊かな日照と多雨に適合した優良品種が選ばれ、林地肥培も進み、生産性の高い林業となるでしょう。

## 進む林道網の整備

近く着工される紫尾幹線林道は、大川鈴木段から大口市に至る55.4キロメートルのもので阿久根地区は21キロメートルとなっています。

昭和60年の林道は、このような幹線林道をはじめと

して各林道網が完成し、本来の目的の外に、地域住民の生活道路はもとより、観光的にも大きく利用されることになるでしょう。

## もうそう竹林345ヘクタール

高温多雨の市の林業にとって、期待されるもののひとつにもうそう竹があります。

昭和60年の面積は現在の約10倍の345ヘクタールとなるものと思われます。

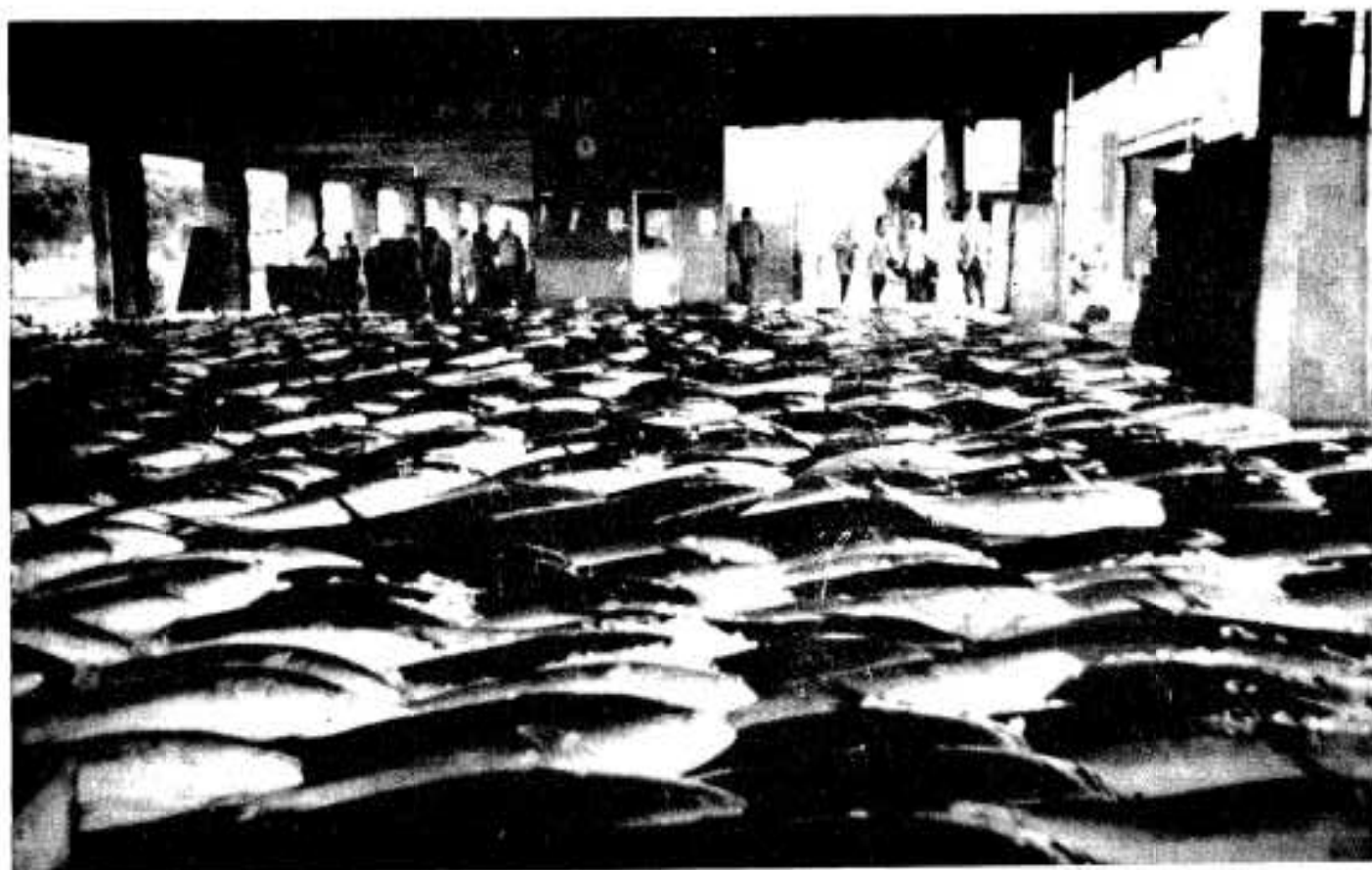
そのうち、たけのこを生産するための竹林が約100ヘクタールとなるでしょう。

この竹林のもたらす収益も約1億1千万円になるものと思われます。



(豊かな竹林)

## = 水 産 業 =



(阿久根漁港風景)

## とる漁業から育てる漁業へ

昭和60年の漁業は、現在のとる漁業から育てる漁業へ大きく転換するものと思われます。

冬でも養殖に適する水温をもつ40キロメートルにおよぶ海岸線一帯には、各種の大規模な養殖場がつくられることでしょう。

それは魚類だけに限らず、わかめ、のり、あわび、うに、にまでおよび新しい技術と改良によって安定した養殖が行なわれるものと思われます。

## 漁船の大型化、動力化

沿岸沖合漁業は昭和60年には、すべての漁船は動力化

され、規模も大型化するものと思われます。

魚群探知器や通信施設の整備が魚具や魚法の改良とともに大きな力を発揮するものと思われます。

## 観光と漁業

昭和60年の漁業で特に著しい傾向は全国の観光客に対して、釣らせる漁業、たべさせる漁業が大きく伸びていることでしょう。

そのために大型のフィッシングセンターが設置されることになるでしょう。

## = 工

## 業 =

## 製造業従事者 2,300人

40年国調による製造業の従事者は、約 1,200人となっていますが、昭和60年には約2倍の 2,300人になると思われます。

業種では、精密機械、皮革製品などが大きく伸びる反面、農産物を原料とする飲食品工業はやや減少するものと思われます。



(精密機械工場)

## 万丈の気を吐く水産加工業

昭和60年では、『あくね塩干魚』の名は全九州、または全国的にその名をしられるようになるでしょう。

施設の改善、原料および製品の流通機構が完備して名実ともに日本の『あくね塩干魚』となるものと思われます。

## 近代工業の発展

昭和60年には、重化学工業や、石油工業などの進展は望めないが、精密機械や皮革製品工業などの、近代工業が発展するものと思われます。

また、主婦の内職的なものとして、これらの下請け工業や手織工業などが、大きく伸びるものと思われます。

## = 商

## 業 =

## 近代化する街や店

昭和60年の市の人口は相当に減少するものと思われるにもかかわらず市民所得の向上、観光事業の進展、企業の進出や公共事業の進展などにより商店も、街も近代化され、大型化するものと思われます。

駐車場の完備した大型ショッピングセンターや高級品をあつかう商店が、消費者の高度選択にこたえることになるでしょう。

## 完備する卸総合センター

多量の物資を安く購売するための卸総合センターが完

備されることになるでしょう。

これは単なる卸荷の集団化ではなく、配送、保管、特に情報収集機能などが主な仕事となるでしょう。

## 1店、販売額 2,300万円

昭和41年の小売店の平均販売額は約 400万円となっていますが、昭和60年には約6倍近くの 2,300万円になるものと思われます。

しかし、これはあくまでも平均であって中にはこれと比較にならないスーパー店なども出現することでしょう。

## ＝ 観 光 ＝

## 日本の観光地阿久根

現在の観光地としての阿久根は、大島を一枚看板としているに過ぎないが、昭和60年にはあらゆる面にすぐれた日本の観光地阿久根として大きくクロズアップされているものと思われます。

## 海浜レクリエーションの基地

暖かい気候と、きれいな海と空をもつ阿久根は、今後、観光の傾向として海の観光が大きく進展するでしょう。

豊かな40キロメートルの海岸線と、大島、桑島などの島々、また天草、長島、こしき島を対象とした釣と海のレクリエーションの基地として、飛躍的に発展するものと思われる。

## 再開発される温泉街

大丸町、鶴見町一帯は南国情緒豊かな亜熱帯植物の生いしげる中に近代的なホテル、旅館をはじめ、あらゆるレジャー施設が設置された一大観光街となっているものと思われる。

しかし、これはあくまでも健康であかるい街であり、市民のためにも大きく役立つ地域となることでしょう。

## 夢は大きい黒之瀬戸大橋

昭和47年に完成する黒之瀬戸大橋（仮に黒之瀬戸大橋と呼ぶ）によって長崎、雲仙、天草、長島と結ぶ観光、

産業のルートが整備されます。

急流の黒之瀬戸にかかる夢の大橋の周辺には全国から集まる観光客のための健全なあらゆるレジャー施設が完備することになるでしょう。



（九州一の海水浴場大島）

## 海に面した保養地帯の出現

昭和40年後半から昭和50年代にかけては、セカンドハウス（第2の住宅）時代がくるといわれています。

温暖な海を求めて市内の海浜近くには国民宿舎、ユースホステル、会社や工場の保養所、民間の別荘などが並び、住民の明日への英気を養うために大いに役立つものとなるでしょう。

# 新らしい地域社会

## 市街地／農山漁村

### 整備される生活環境

昭和60年のわたくしたちの生活環境は、市街地を中心として市街地区生活圏、脇本小中学校地区および大川小中学校地区を中心とする農村地区生活圏が完備することでしょう。

この生活圏には、日常の市民生活に必要なすべての公的、私的な施設が完備されることとなるでしょう。

### 整然たる楽しい街

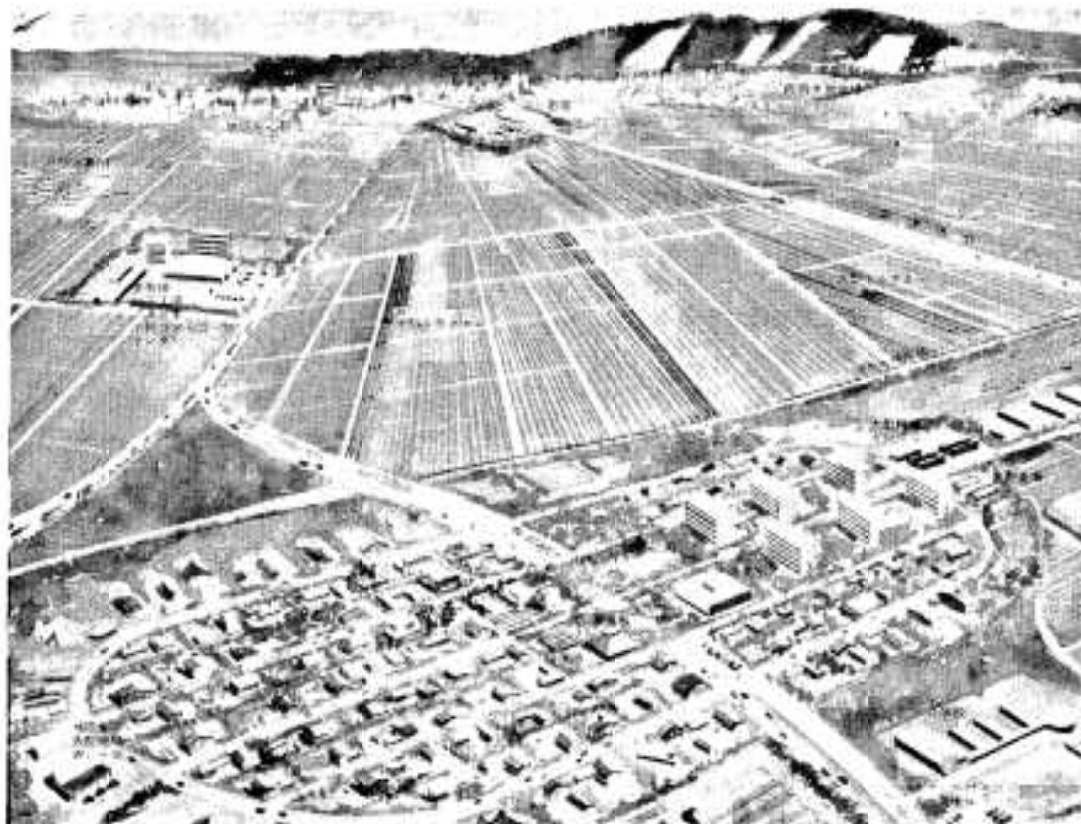
昭和60年の市街地は、総人口の約半数に近い15,000人の人が住むものと思われます。

広い道路と整然と区画された街並、一つ一つ特色のある楽しい通りが完備し、各所に駐車場の完備した市の中心地区となると思われます。

### 再編成される農村地区

現在82区ある自然集落区は昭和60年には約50地区～40地区に統合されることになるでしょう。

脇本、大川の生活圏のほか折口、鶴川内、田代、山下、西目、牛之浜にはそれぞれ第1次の小さな生活圏もできることと想われます。



(将来の農村地域社会)

# 豊かな生活と充実する社会福祉

住宅／保険／医療／  
福祉／教育

## 快適な住宅環境

昭和60年の市民の住宅は85㎡（27.5坪）となり、環境のよい敷地、水道、ガスの完備されたものとなるでしょう。

農村地区においても、住宅環境は全く都市居住者と同じような設備が整い、豊かな生活を楽しむことができるようになるでしょう。

## 上下水道、し尿ごみの処理は完全

農村地区をも含めて水道の普及は100%近くになるでしょう。

また、市街地では下水道が普及するものと思われます。

し尿、ごみの処理も、合理的なシステムによって、完全に処理されることになるでしょう。

## 医療給付はすべて 100%

昭和60年の市の医療機関は、国立または公立の総合病院を中心にして、長島、こしき島、野田地区を含めた広域的な医療の中心地となるものと思われます。

また、市民全部が何らかの医療保険に加入することになり、その給付もすべて100%となるでしょう。

## 老後を楽しむ年金制度の充実

昭和60年には市内の老令人口65歳以上は、総人口が減るにもかかわらず13.7%の3,700名にも達するものと思わ

れます。

このとしよりたちのために、老後の生活保障というより、生活を楽しむための年金、老人福祉センターなどが充実するものと思われます。

## 母子、児童の福祉

昭和60年には、市内のどこの生活圏にも児童館、保育所が完備するものと思われます。

母子の福祉、身体障害者の福祉は大きく進み職業再訓練の施設も兼ねた施設が完備するでしょう。

## 水から脱皮する消防

昭和60年の消防は、消す消防から予防する消防へと変わっているでしょう。

しかし、不燃性の住居が普及する反面、油断性をはじめ可燃性の物質が、家庭内に入り込む機会が多くなることが予想されます。

また、現在水だけに頼っている消火は水のみに頼らない、化学消防が充実されるものと思われます。

## 救急センターの設置

増大する交通事故公害事故から、市民を守るためには救急、治療、機能回復職業訓練の一大総合センターが設置されることになるでしょう。

また、交通共済の制度も一そうの充実がなされることと思われます。

## 小中学校の整備統合

昭和60年の市内の小中学校の児童生徒の数は、昭和40年の約半数になるものと思われます。

このため市内の小中学校は、最も教育効果のあがる適正規模の学校へ再編成されていることと思われます。

(小中学校生徒数)

| 年 度   | 40    | 50    | 60    |
|-------|-------|-------|-------|
| 小 学 校 | 4,985 | 3,150 | 2,700 |
| 中 学 校 | 3,037 | 1,800 | 1,450 |

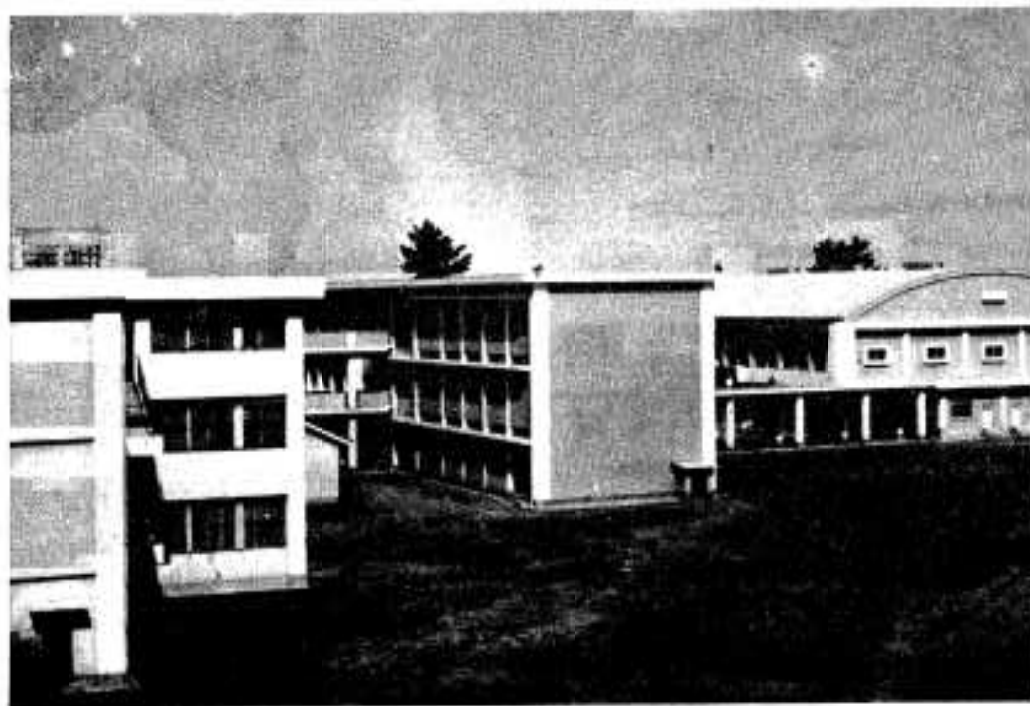
## 高校大学も充実

昭和60年における高校進学率は90%近く、また、大学進学率も30%に上昇するものと思われます。

このため、高校における学科の充実と大学の一校は、自宅から通学可能な地域に設立されていると思われます。

## 希望者はすべて幼稚園に

幼児教育は昭和60年代には大きくのびて、幼稚園は少なくとも、小学校のおかれている地区にはすべて設立され、希望するすべての児童が通園することになるでしょう。



(整備された阿久根高校)

## || あとがき ||

敗戦と、混乱、復興と引揚者のあふれていた昭和二十二、三年頃わたくしどもははじめて公営住宅の建設を手がけたのであった。

そのとき、わたくしどものいつわらない気持は、住めさえすれば、雨露をしのぎさえすれば、ということだった。

はなはだけしからぬことではあるが、そのときは、それが至極当然な常識でさえあったのである。

それから二〇年、誰が今の日本の繁栄を考え、一口一台の自動車の保有を考え人がいたであろうか。

およそ、文化生活にほど遠く、駐車場のない古ぼけた公営住宅の建設を、無計画だ、ビジョンがなかったなどとせめる人の、今ではいかに多いことか……。

ビジョンは、特に常識ではない。

常識をこえるところに、ビジョンがあるともいわれる。

しかしまた、ビジョンとは、われわれの生活から、かけはなれ、全く実現性の無いものであってはならない、各位のご協力を切にお願いしたい。